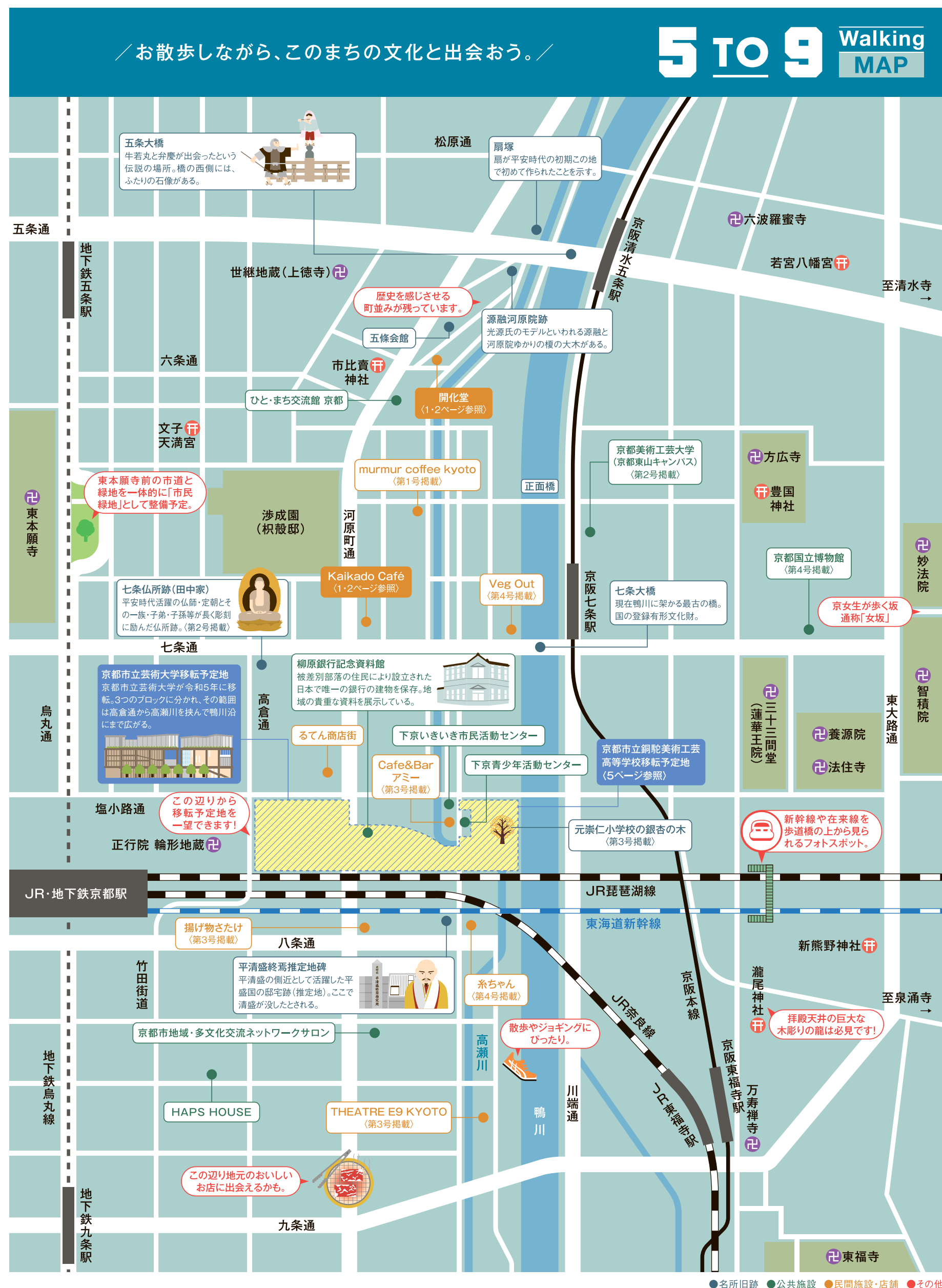




…… **御意見・御感想大募集!**

5TO9(ゴートゥ・ナイン)への御意見・御感想の他、「こんな素敵な人がいる! あんな素敵な場所がある!」という情報をぜひお寄せください!

※いただいた内容は、誌面上で紹介する場合がございます。

【お送り先】▶京都市総合企画局プロジェクト推進室 TEL.075-222-3176(土、日、祝を除く 午前8:45~午後5:30) FAX.075-213-0443  
〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地 ☒project@city.kyoto.lg.jp



京都駅東部エリアのカルチャーを発信。

# 5 to 9

KYOTO East side CULTURE JOURNAL

| Special Interview |

開化堂

## 八木聖二さん・隆裕さんが語る まちのこれまでとこれから。



November 2021

vol.  
05





# 八木聖二さん・隆裕さんが語るまちの

## これまでとこれから。

### 河原町五条の南側で、 代々「日常使い」のものづくり。

創業は明治8年、日本で最も古い歴史を持つ手づくり茶筒の製造元である開化堂。海外の目利きにも愛される老舗は代々、河原町五条の南側で商いを続けている。

五代目の八木聖二さんは、「このへんは昔から職人の多いところで、以前はカルタや扇子が盛んにつくられていました」と、自身も生まれ育ったこのまちについて語る。京都駅や四条などの繁華街に近いにもかかわらず、開化堂のまわりは高瀬川を中心にゆるやかな時間が流れる。「お客さんから『いいところですね』とよく言われるんです」と聖二さんは目を細くする。「開化堂の基本は『ハレ』ではなく『ケ』の中に、つまり『日常使い』の中で最上級を目指すことにあります。日常生活と関係のない工場地帯なんかでものづくりをしていると感覚が

ずれてしまう。そういった意味で、程よい生活感のあるこのまちは開化堂のものづくりにちょうどえんです」。

### まちへの入口、 創作・発表の場としてのカフェ。

六代目の隆裕さんは、このまちの魅力を伝える一つの手段として、6年前、河原町七条「Kaikado Café」を開いた。カフェを入口として、より多くの人にまちに来てもらおうと始めたと話す。

令和5年度には、近くに京都市立芸術大学が移転する。「いくら近所でも知らないエリアにはなかなか来にくいでしょうから、学生さんにはカフェを起点にまちになじんでもらえればと思っています。『絵を描く人は見る人よりも幸せ度が高い』という話を昔聞きました。京都芸大の学生さんたちに来てもらうことで、創作することが身近になり、このまちで幸せを感じる人が増えるといいなと。以前、

学生がカフェでバイトをしながら作品をつくって発表し、フランス人のシェフがそれを基に皿を作ったことがありました。こんな風に創作と発表の場としてもカフェを使ってもらえればと思っています」。



Profile | やぎたかひろ  
八木隆裕 (六代目)

1974年京都府生まれ。株式会社開化堂代表取締役社長。大学卒業後、会社員生活を経て平成12年に父に弟子入り。

Profile  
株式会社開化堂

明治8年(1875)創業の手づくり茶筒の老舗。ブリキや銅、真鍮を用い、1世紀以上変わらぬ工程でつくられる茶筒や丸缶は国内外で高い評価を得ている。

# 5 To 9 Seiji Yagi and Takahiro Yagi of Kaikado talk about the past and future of this town. Special Interview

## これまでの地域の歩みを 尊重しつつ、 京都芸大ならではの発想を。

聖二さんは芸大生とまちのかかわりについて、こんな期待を抱く。「地域コミュニティの維持に欠かせない運動会や夏祭りといった地域の行事にも芸大生の創造力を発揮していただくと嬉しい。これまでこのまちが紡いできた文化は大切にしてもらいながら、そこに芸大生の発想が加わったら、まちの可能性は無限に広がると思っています」。そのために、芸大生がまちに根づいてくれることを願う。「ちょっと欲張り過ぎかもしれないけど、卒業したら出ていくのではなく、ここに腰を据えて多くの人と交わったり、いろんなことを経験して、このまちのこれからと一緒に歩んでもらえると嬉しいですね」。

そしてまちの未来のために、芸大生を受け入れるまちの人たちの意識も大切だと聖二さんは言う。「もし学生さんが変わったことをしても、あんまり目くじらを立てんようにせんとね。そもそも普通とは違うことをやるのが芸術やし、そうでないと新しいことなんて生まれません」。

## 今は千載一遇のチャンス。

このまちの魅力を一言で表すとすれば、「バランス」だと隆裕さんは言う。「僕が小さい頃も、その時はその時なりにまちのバランスが保たれていたと思っています。このまちにはいろんなものと人が入り混じっているけれど、不思議とバランスがとれてしまう。それがととても面白くて。そのバランスを構築するものは、時代とともに変わり、ここ数年は若い人が店を出したり、外国の方も訪れるようになったりと、また違ったバランスが生まれてきたなと感じていました」。



創業より変わらぬ工程でつくられる開化堂の茶筒。

そして今、まちは千載一遇の好機を迎えていると続ける。「コロナ禍で来る人が少なくなって、まち全体がいい意味でフラットになっています。そして2年後に京都芸大移転を控え、まちのバランスが再び変わろうとしている。開化堂の屋号は初代が『文明開化』からつけたそうです。当時イギリスから入ってきたばかりの鋳力(ブリキ)を使ってさまざまなものづくりを始め、その中で茶筒が残るわけですが、今思うとベンチャー精神がめっちゃくちや旺盛な人やったんでしょね。今は初代のように新しい何かを始める絶好のチャンスやと思うんです。今を生きる僕は、この転換点を活かして、まちをさらに盛り上げるためには何をしたらええんやろう…最近はそのことをよく考えていて。これも結構楽しいんですよ」。



まちの魅力を伝える手段の一つとして平成28年に開業したKaikado Café。





## 創意 作図

Creative Intent

若いアーティストたちが京都市立芸術大学移転予定地を題材にしたアート作品を制作していく「移りゆくまち」プロジェクト。今回は同大学の大学院で学びながら、写真を用いた作品づくりをしている清水花菜さんが制作に取り組んだ。

## 人びとの記憶から 取りこぼされないよう、 その日のまちの姿を 残したい。



### 人は自分の知らないことを知っていて、 人の話を聞くと視点が変わる。

清水さんの作品のタイトルは「街の話」。京都芸大の移転予定地周辺を地域の人と歩きながら撮った写真と、そのときに交わした会話を基にした文章により作品を構成した。

「歩くことと人と話をすることが好きで、移転予定地周辺がどんな場所なのか地域の人の言葉で知りたかったのが、この作品に取り組んだきっかけです。私は、人は自分の知らないことを知っていて、見える景色が変わることもあるように思っていて、地域の人にも『なんの気なしに歩いてたけど、ここはそんなええところやったんか』といった視点が変わる面白さを、作品をととして伝えることができればと考えています」。

### その人らしい表情やありのままの風景を まちの記憶として残す。

写真は「その人らしい」ものにこだわった。「よそいきの顔ではなく『この人は普段から表情筋をこう動かして笑うんやろな』と感じた瞬間を撮りました。そして、その人が、この地で過ごしてきたからこそ知っている、ありのままのまちの風景。大切な思い出や思い出のある場所を教えていただき、撮影しました」と、清水さんは笑顔で語る。「まちはたった一週間で変化します。京都芸大が移転するとさらに大きく変わります。記憶や写真からも取りこぼされてしまうものを少しでも残せるように作品を制作しました」。

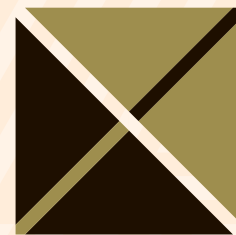
撮影にはフィルムカメラを用いた。「デジカメと違って現像するまで何が写っているかわからないので『宝箱』みたいな感じなんです。隅っこにおばちゃんのがんびり座っていたり、猫が道を横切っていたり、本当にいろんな予期せぬ風景が写り込んでますよ(笑)」。

### まちの中心部で何ができるか。 さまざまな可能性にチャレンジ。

京都芸大移転については、「郊外から市内中心部に移転すると刺激が増え、行動範囲も大きく広がると思います。移転先でしか見つけられないものがあるでしょうし、生活をしてみて発見できることなども、今の環境とは随分変わると思います。移転後の学生には学外に能動的に飛び出して地域の人とかかわり、いろんな体験をしてそれを作品づくりに生かしてほしいですね」と清水さん。鴨川や京都駅に近いことも魅力という。「川遊びをしながら創作のヒントが得られるかもしれないし、交通アクセスがよくなってより広い範囲から学生が集まるので、今まで以上に多様性が生まれそう。それがまちのいい刺激になれば素敵ですね」。その一方で、「今は、郊外にある学校だからこそ、制作の途中で出てくる音やにおいも含め、五感をフルに発動させながら伸び伸びと作品づくりができています。移転後は、まちの中心部ならではの制限がきつとあると思うので、その中で何ができるか可能性を探るのは、学生にとってもまちにとっても大切なこと」だと考えている。

京都芸大が移転する令和5年度には大学院を修了している予定だが、修了後も京都芸大の近くを歩きたいと話す清水さん。「この辺りをぶらぶらするたびに発見や出会いがあって飽きないんです。自分にとって歩くことは制作の中でとても大事なことになるので、ちょっとずつでもその日のまちの姿を見守ってきたいですね」。

アーティスト 清水花菜さん  
兵庫県出身。京都市立芸術大学美術学部構想設計専攻卒業。現在、同大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻構想設計に在籍。

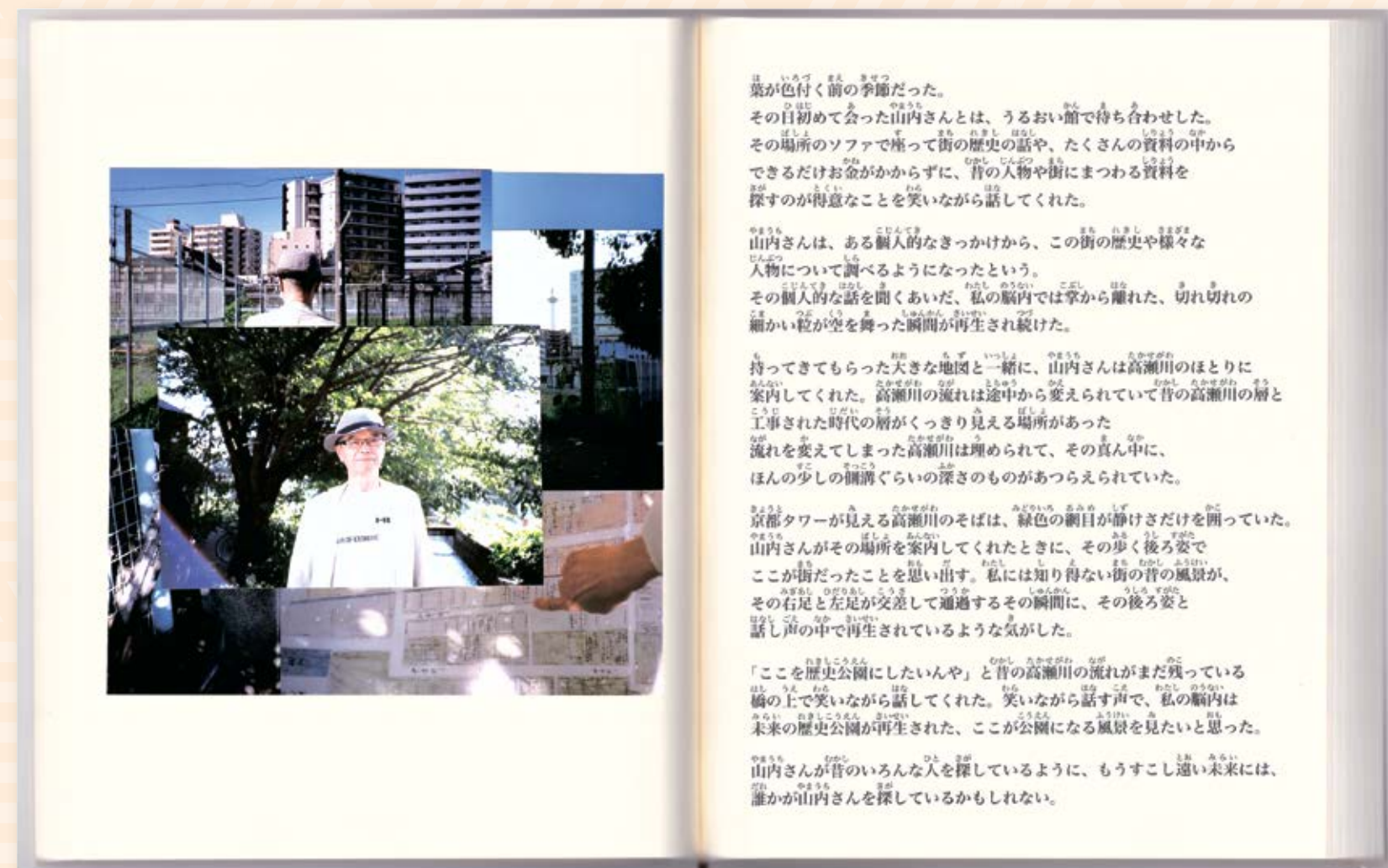
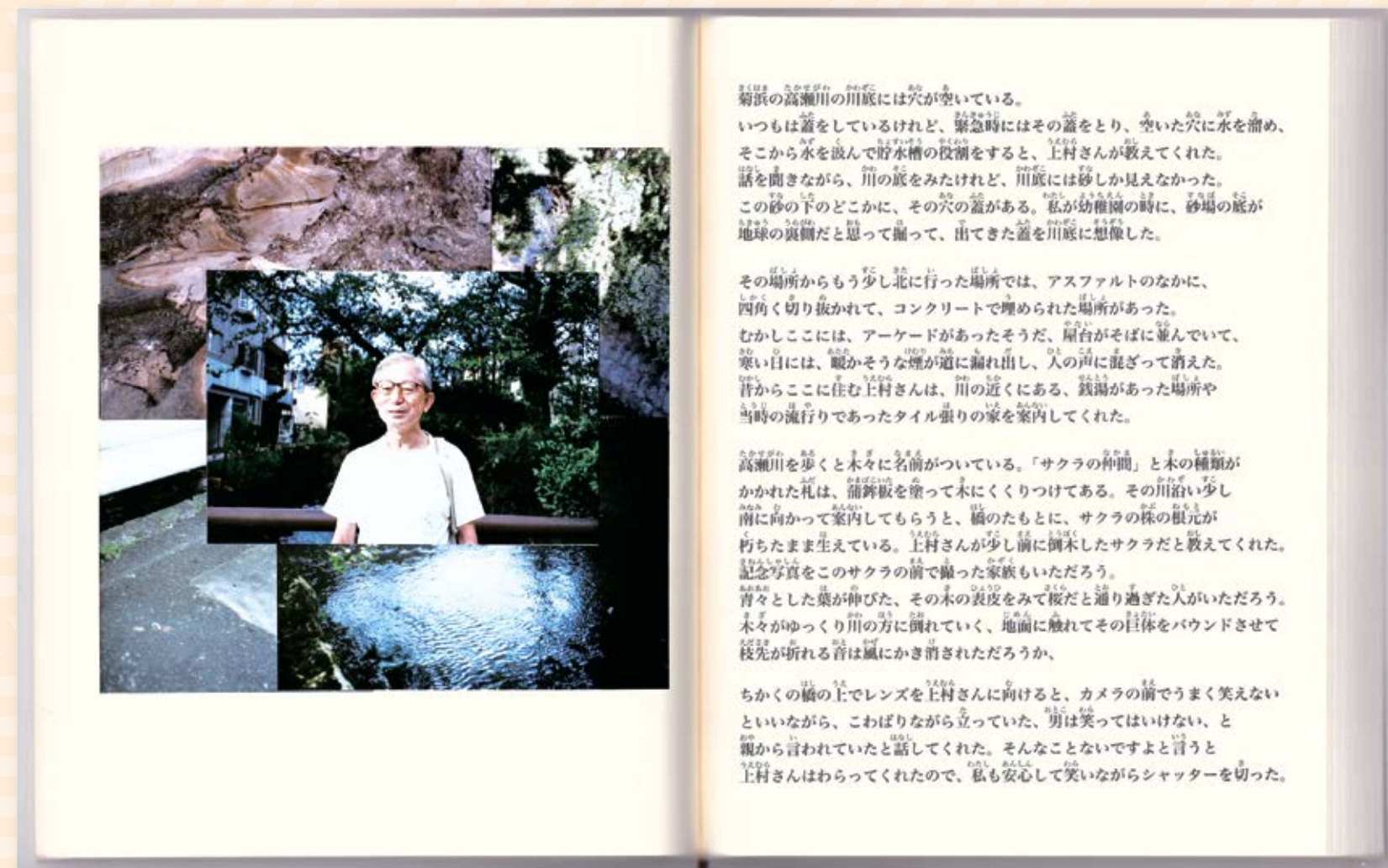


## アート 作品

Artwork

### 作品名——街の話（高瀬川編）

今回は、京都芸大移転予定地を流れる高瀬川沿いを上村隆明さん(菊浜高瀬川保勝会会長)と山内政夫さん(崇仁高瀬川保勝会会長)と一緒に歩いて制作した。





# 京都駅東部エリアで 新たな歴史を刻み始める 京都市立銅駝美術工芸高校。

令和5年度に、京都市立芸術大学と共に京都駅東部エリアに移転する京都市立銅駝美術工芸高校（移転後は「京都市立美術工芸高校」に校名が変更）。校長の名和野新吾さんと1年生の足立風香さんに、140年を超える歴史を持つ学校の魅力や移転する地域とのかかわりについて伺った。



移転先の校舎の全景イメージ図



高校・鴨川テラスのイメージ図



校長の名和野新吾（なわの しんご）さん／1年生の足立風香（あだち ふうか）さん

## 日本でも稀な美術工芸高校。

名和野校長は「明治13年（1880）創立の本校はこれまでに文化勲章受章者を含め多数の作家を輩出しています。設置している専攻についても、日本画、洋画、彫刻、漆芸、陶芸、染織、デザイン、ファッションアートと8分野もあるのは日本でも稀で、美術工芸の幅広い分野を学べます」と胸を張る。特に「漆芸とファッションアートを本格的に学べる高校は本校しかないため、ここには全国から生徒が集まり、それによって生まれた多様性は生徒たちの良い刺激となっています」と語る。

## 朝ドラで漆芸に惹かれ高知県から進学。

「私が美工に進学したのは漆芸を専攻したかったからです」と高知県から進学した足立さんは言う。「小学生のとき、輪島塗が登場するNHKの朝ドラにはまり、高校では漆芸を学びたいと思っていました。県内に漆芸を学べる高校がなく、美工の存在を知ったときはとても嬉しかったです。京都の歴史や文化に惹かれたのも進学理由の一つですね。」

学校については、「みんな美術が好きで来ているので話が弾み、お互いに知らないことを教え合うのはとても刺激的です。先生はみんな専門知識が豊富で、何か質問するの的確に答えてくださるのは感動的でした」と続ける。

## ものをつくる人はものに優しく人にも優しい。

令和5年度には京都駅東部エリアに移転し、校名も「京都市立美術工芸高校」に変わり、およそ270名の生徒が新しい地域で学び始める。「その暁には京都市立芸術大学との交流の機会を積極的につくり、本校生徒が芸大生の振る舞いや作品に触れることで、高校の3年間だけではなくその先を見通せるような環境を築きたいと考えています」と名和野校長は言う。

「ものをつくる人はものに優しく、人にも優しい人が多いです。中にはシャイで人見知りする生徒もありますが、本当に優しい生徒ばかりなので、地域の皆さんには温かく受け入れていただきたいですね。地域の祭りで子どもたちの似顔絵を描いたり、商店街のマップをつくったり、本校の強みを生かして地域の皆さんに喜んでいただける取組を作っていきたいと思います」と移転後の学校の在り方について語る。

## 京都芸大、そして地域との交流に今から興味津々。

移転後、京都芸大と近くなることについて、足立さんは「高校生と大学生で考え方がどのように違うのか、そして大学で学ぶとどのように成長できるのか知りたいです。京都芸大との交流の機会があればぜひ参加したいです」と今から胸を弾ませる。

「美工ではこれまでに、近所の商店街に作品を置いてスタンプラリーを開催したことがあり、参加したお店の方からも『若い人たちとの触れ合いが楽しかった』という声が寄せられたと聞いています。移転先でもそのような地域の皆さんに元気になっていただく取組をやりたい」と、地域との交流にも意欲的な足立さん。移転後、地域で子どもたちと大人をつなぐ存在となり活躍する高校生の姿に期待したい。



毎年10月に開催されている「美工作品展」



from  
京都市立  
芸術大学



フットライトのデザイン制作に取り組んだ学生たち

## まちは、人びとの 想いが折り重なりできている。

「地域の方々を対象としたアンケートでは、フットライトのデザインのモチーフについて、四季の変化を感じる植物や、暮らしの身近にある高瀬川にまつわるものを望むという回答が寄せられました。学生たちはその結果を参考にデザインに着手しました。」

私は、まちは人々の想いが折り重なってできているものと考えています。人々の想いに触れるため、まずは、地域の現状や歴史を学ぶよう指導しました。その上で学生たちは、まちの将来像を描き、須原通が今後地域のためにどのような役割を果たすとなるとよいか、それを促すフットライトのデザインはどのようなものかをイメージして制作に取り組みました。

通常、大学では教員がつくった課題を与え、できあがったものを教員が評価することの繰り返しですが、この取組では課題を与えて評価するのは地域の方々です。現場では予想外の声を耳にすることがあり、学生が驚いたり、悩んだりすることもしばしばあります。このような経験から学生は学内では得られない、生きた現場の感覚を学んでいきます。

今回、地域の方々の声をもとにしたイメージを具現化する制作に携われたことは学生にとっての糧になったと考えています」。

## 学生たちが地域の想いをカタチにした フットライトのデザイン案（一部）。



- A 近所に保育園があることから幼い子どもも知っているチューリップをデザイン。
- B 高瀬川にはさまざまな荷物を載せた船が通っていたという歴史を後世に伝えるため高瀬舟をデザイン。
- C 春を感じられるサクラをデザイン。

全てのデザイン案は、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンに12月17日（金）まで掲示しています。



フットライトとは

道路全体を照らす道路照明灯とは違い、高さ1m以下の足元付近を照らす照明灯。

5to9 街のあの人、あの場所へ。



京都市立芸術大学  
美術学部教授  
藤本英子さん

京都市では京都駅東南部エリアで「文化芸術」と「若者」を基軸としたまちづくりを進める中で、同エリアの東九条地区と京都駅や京都市立芸術大学（令和5年度移転予定）をつなぐ須原通と高瀬川沿いに魅力的な歩行空間や水辺空間を創出するための整備を計画している。その一環として、通り沿いに設けるフットライト（道路脇の足元灯）のデザイン制作を、京都芸大の環境デザイン専攻の学生たちが担当した。同専攻教授の藤本英子さんに、学生の指導で心掛けたことや地域とのかかわりについて伺った。

## 京都芸大と地域が 共に『創造』していく。

京都芸大移転予定地周辺の地域との関係について、藤本さんはこう考えている。「京都芸大は『創造』で成り立っている大学です。美術にしろ音楽にしろ、人間は本来何かを創る喜びを持っています。地域の方々には、私たちと何かを創造する『メンバー』になっていただくと嬉しいです。それが、京都芸大と地域が交わり、理解し合い、ワクワクするまちを共に創るという、かつてない試みにつながるのではと楽しみにしています」。

## 東九条地区の歩行空間等整備のイメージ図（令和6年度完成予定）

